

第12章

子どものワークショップの体験理解の可能性

本研究は、子どものワークショップという日常性の中で営まれるワークショップ実践に関して、関与観察と vitality affect の感受に基づくエピソード記述の考察とビデオ記録に基づくコーディング分析との比較検討を試み、体験の実感といった感性的な視点からの体験理解のあり方を考察した。それによってワークショップの体験理解と研究方法について、次のことが明らかになった。

1. かかり合う中でワークショップ体験の動態を捉える研究方法

本研究では、実践の外部者として観察者が設定する目的に即して客観的に把握される行為からワークショップの体験理解を進めるのではなく、場に関与する中で感受される実感に根差したワークショップの体験理解を試みた。そうした視点から見えてきたのは筆者の感受認識を越える、予想外の参加者の体験の実感との出会いであった。

例えば、絵画表現ワークショップでは、ノブヨシが足に絵の具をつけて滑る理由を（第7章4（1））、描く楽しさや滑る感触の面白さではなく、「危ない！」と声を上げる周囲の反応が面白くて注意を惹きたいがためではないかとも考えた。筆者が場の主催者・管理者としての意識でかかわっている間は危険な行為としか捉えられなかった。しかし、その場に関与し続ける中で「こんなに汚れたの初めて！」と嬉しそうに声を上げる彼の情動の力動感が筆者にも通底してきた瞬間、彼が心から面白がり、愉しんでいるという

ことがにわかに感じられるようになった。

また、ミナエが鑑賞の時に嬉しくなって魚に扮して突然駆け出すエピソードでも（第7章3（3））、彼女が感じている愉しさの情動を感受したからこそ、その力動感が身体を突き動かして駆け出させたのだということが分かった。

このように、ワークショップの中での何気ない子どもたちの様子ややり取りは、一見すると目的が曖昧な楽しいだけの姿に見えてしまう。そのとき観察者は客観的に何が（What）行なわれているかという行為に着目して体験を理解している。しかし、上記のエピソード記述の考察においては、そうした出来事がどのような（How）体験の実感でもって体験されているかという「体験・情動（How）ベースの相互交流の理解」（第4章表4-3）へと視点が変移したことで、共にある対人コミュニケーションの関係（Stern, 1989）としてじゃれ合い自体を愉しんでおり、それが参加者にとっては価値ある体験の実質であるということが分かったわけである。

しかしながら、こうした体験理解は、外部的で目的的な観察者の視点から客観的に確認できる相互行為の理解からでは認識するには至らなかったものである。客観的な事実だけでなく vitality affect の感受とエピソード記述によってワークショップ体験が持つ曖昧な感性的位相を、相互浸透的な動態も含めて実感に根ざして捉え考察したことによって、こうした体験理解が生まれるのである。

このような感受された体験に基づく理解は、本研究ではビデオ記録に基づくコーディングによる時系列分析と相互参照された。エピソード記述の考察結果をコーディングによるワークショップの継時的な体験構造図（第7章図7-8、第8章図8-9）の中で確認してみると、先のノブヨシの足に絵の具をつけて滑るエピソードは【1：受容と安心感】の概念が出現する場所に重なり、【2：情動の表出・表現】の出現場面の直前に位置していた。このことからノブヨシの姿は、ワークショップ開始後に場の中に受容されて安心感を感じ始めるなか、足に絵の具をつける面白さや滑る感触の心地よさの中で次第に情動が表出され始めた姿であったことが分かる。同様に「エピソード2：ジュンイチが絵の中に」は【3：溶解体験】の出現箇所、「エピソード3：楽し

くなくて動き出す」でミナエが魚になって駆け出す姿は【2：情動の表出・表現】に、「エピソード4：カオルのファシリテーションの変化」は【4：情動の媒介・共有】に重なっていた。

映像表現ワークショップでも同様に、多くのエピソードが抽出された時系列上の場面は【3：安心感から情動の表出と媒介へ】、【4：感受認識の変容】、【5：情動を生きる体験】、【6：接続と充填】が重層的に出現する場所となっている。

こうした結果から言えるのは、関与観察と vitality affect の間主観的な感受に基づくエピソード記述の研究方法は、ワークショップ体験の動態を捉えて描き出すことができ、それは十分な明証性を持った研究方法であるということである。

2. 充填と接続というワークショップの体験理解の新たな視点

ワークショップの場に関与する中で感じられた実感に基づく体験理解を通して明らかになったのは、企画者や観察者が目的と考えるような出来事とは異なる、何気ない行為の中での情動の交わり合いも参加者におけるワークショップ体験の実質であるということであった。その体験の実質を考える中で、本研究では「充填」と「接続」という二つの概念を導き出した。

(1) 充填

本研究の中で、筆者にとってワークショップ実践の質を根本的に変える契機になったのは、場に内在する関与観察を通して参加者との情動の接面に繋がったことで、相手の感じている実感がこちらにも通底してくることでもたらされた体験理解であった。こうした相互的な情動の力動感の繋がりととは、力動感がこちら側に間主観的に流入してくるという実感として伝わってくる。先程のミナエが魚になって駆け出した例にあるように、この力動感とは体験から生成された、自らを突き動かす情動的な力動であり、活動を意味あるものと感じることで自己をさらに活動へと投企させる原動力となる。

ジュンイチが絵の具の感触に引き込まれ、手足だけでなく身体全体が絵の